

官兵衛を



1

説得の妙

相手を思いやる人間性

勝つ「こと」を目指す。しかし、時は戦国、説得には武力が必要である。

通常は相手の城を囲むなどして圧力を加え、相手にこれ以上の戦いは無理と感じさせたところ

合いを見て降伏交渉に持ち込む。武力は説得を成功させるための「伝家の宝刀」であり、できるだけ抜かないのが官兵衛流である。

官兵衛は丸腰で単身城内に乗り込み、礼を尽くして北条氏政、氏直父子に対面。大軍に包囲された北条氏にもはや勝ち目はないことを自覚させ、家名の存続、城兵の助命などを条件に

れることは極めてまれである。説得工作がこのように成功する背景には官兵衛の理路整然とした弁舌があった。しかし、それ以上に相手の立場も思いやる官兵衛の誠実さ、人間性が相手の心を開いたことを見逃せない。官兵衛が説得時の約束を守り、降伏した武将も相応の立場が守られることが周辺にも伝わるため、相手も官兵衛の言葉を信用し、説得工作が次々に成功するのである。

秀吉に天下を取らせ、「希代の軍師」と称される黒田官兵衛孝高。播磨に生まれ、類まれな知力を駆使して戦国の世を戦い、福岡藩五十二万石の礎を築く。生涯で五十数回も戦いながら一度も負けなかった官兵衛はいかなる武将であったのか。そんな官兵衛の成功の秘訣、人間像を「黒田家譜」、「ルイス・フロイスの日本史」などから探ってみる。

官兵衛の作戦の最大の特徴は、できるだけ血を流さず、相手方を説得によって降伏させるよう全力を挙げ、「戦わずして



黒田官兵衛の死の直後に描かれた「如水居士像」(崇福寺蔵)

め、九州攻めなどで次々と成功を収める。数多の説得工作の中で最も有名なものが秀吉の天下統一の仕上げとなった小田原城攻めである。

説得、開城させる。金子堅太郎の「黒田如水伝」はこの時の官兵衛のせりふを「北条家目下の情態は、宛も烈火を以て、釜中の魚を煮るが如く、其の運命既に定まりたり」などと記す。官兵衛には北条氏から家伝の「日光一文字」の刀、鎌倉幕府の歴史書「吾妻鑑」、「白色の法螺貝」が贈られ、今に伝わる。敗軍の将からこのような由緒ある家宝を贈ら

れることは極めてまれである。説得工作がこのように成功する背景には官兵衛の理路整然とした弁舌があった。しかし、それ以上に相手の立場も思いやる官兵衛の誠実さ、人間性が相手の心を開いたことを見逃せない。官兵衛が説得時の約束を守り、降伏した武将も相応の立場が守られることが周辺にも伝わるため、相手も官兵衛の言葉を信用し、説得工作が次々に成功するのである。

秀吉は20万余りの大軍で小田原城を取り囲んだが、堅固な小田原城はなかなか落城しなかった。そこで秀吉は力攻めをあきらめ、最後は官兵衛に説得を命ずる。大舞台での主役の登場である。

平成26年NHK大河ドラマの主人公となる戦国武将、黒田官兵衛。その戦略や信条などを「播磨の黒田武士頭彰会」理事、今藤久夫さんが紹介する「官兵衛を探る」。毎月第1、第3木曜に掲載します。

平成26年NHK大河ドラマの主人公となる戦国武将、黒田官兵衛。その戦略や信条などを「播磨の黒田武士頭彰会」理事、今藤久夫さんが紹介する「官兵衛を探る」。毎月第1、第3木曜に掲載します。